第43回法政大学懸賞論文　優秀賞

里親・ファミリーホームにおける
養育者の実子に対する支援と課題

現代福祉学部福祉コミュニティ学科３年

小田　汐織

清水　萌乃佳

橋本　奈都子

「里親・ファミリーホームにおける実子に対する支援と課題」

目次

はじめに
第一章　実子に対する支援に関するこれまでの研究について
　第一節　イギリス・オーストラリアの実子に対する支援
　第二節　国内の実子に関するこれまでの研究について

第二章　ヒアリング調査
　第一節　調査目的と方法
　第二節　ヒアリング団体の概要
　第三節　ヒアリング調査結果

第三章　考察

文献

はじめに

近年、児童虐待の件数は増加傾向にあり、里親・ファミリーホームの委託児童数も増加傾向にある。厚生労働省の調査によると、平成 29 年の登録里親数は 11,730 世帯、委託里親数は 4,245 世帯、委託児童数は 5,424 人と年々増加している。里親やファミリーホームを実施している家庭の中には、里親の実子やファミリーホーム養育者の実子(以下「実子」とする)がいる場合がある。全国児童相談所長会の「児童相談所における里親委託及び遺棄児童に関する調査」によると、実子がいる里親家庭は全体の 43.5%だ。しかし里親や里子への支援が注目される一方で、実子への支援の動きはほとんど見られない。

里親家庭やファミリーホームには、虐待の被害を受けた児童や様々な理由で親元を離れざるを得ない児童が委託される。そのような児童と共に生活をする実子は、心理的な影響を受けることが近年の研究で明らかになっている。山本(2013)の調査によると、実子の両親が里親もしくは養育者になっていることで里子や親をケアする経験を積むと指摘している。よって、実子は親や里子への思いやり、我慢、寂しさ、親への諦め、ロールモデルとしてのプレッシャーなどを抱えていると明らかにした。

このような実子に対して海外では、具体的な支援が行われている。山本(2016)によると、イギリスやオーストラリアなどでは、里親養育を継続させるためには実子が非常に重要な役割を担うことがいくつかの研究で明らかになっている。イギリスでは、里親養育が実子に与える影響は里親制度の主要な問題の一つであるとしている。また、里親に関するイギリスの最低基準の中でも、実子には子どもとしての権利を有していることや里親家庭で育つうえで様々な支援を受けるニーズがあることを明らかにしている。また、里親認定の際に実子への面接は両親である里親希望者とは別室で必ず行われており、実子の家庭での様子の視察も併せて行っている。さらに、イギリスの代表的な里親の研究機関である The Fostering Network や Coram BAAF (British Association for Adoption and Fostering)では、里親家庭の実子向けの冊子を製作しており、研究を踏まえた実子の心境などを詳細に説明する内容になっている。

一方、日本においては具体的な実子への支援がほとんど行われておらず、調査がいくつかなされているのみである。これまでにいくつか行われている調査では、障害児と病児のきょうだいと実子の比較研究も行われており、障害児や病児のきょうだいへの支援から実子支援を考えていくことも示されている。日本では里親等委託を促進するための社会的な関心が高まっており、里親に関する研究の中でも里親家庭の実子への支援の必要性が指摘されるようになったがまだまだ発展途上であると言える(山本　2016)。

たとえば、厚生労働省が 2012 年に作成した「里親及びファミリーホーム養育指針」の中に実子への配慮が明記され、「里親及びファミリーホーム養育指針ハンドブック」にも事例を含め実子に関する内容が含まれるようになった。しかし、養育方針にも実子への配慮が必しかし、養育方針にも実子への配慮が必要であると明記されながらも、実子が求めている配

慮や支援はほとんど明らかになっていない。（山本、2016）

以上のように、里親家庭やファミリーホームの実子として里子・委託児と共に生活している実子は心理的な影響を受け、様々な問題を抱えているため、支援が必要である。さらに、里親家庭やファミリーホームには一定数の実子が存在しており、ニーズもあると言える。先述のように、イギリスやオーストラリアなど海外では里親家庭における実子の研究が盛んに行われており、実際に里親登録時に実子に着目した方法を実践している。一方、日本国内では、里親等委託率を推進するため社会的な関心が高まり、里親に関する研究も盛んになっている。その中でも、里親家庭の里子支援に対する研究も行われているが、実子に対する支援の研究は少ない。

そのため、本論ではまず「里親及びファミリーホームの実子」に関する先行研究を検討し、海外で行われている実子に対する支援についてまとめ、実子が受ける影響について整理する。また、実際に実子支援を行っている NPO 法人にヒアリングをした結果から、実子に対する支援の課題を明らかにし、今後どのように支援を展開してくべきかを考察していくこととする。

第一章　里親家庭における養育者の実子に対する現状と課題

第一節　イギリス・オーストラリアにおける実子に対する支援

前述したように、諸外国では里親家庭の実子に対する支援が行われている。山本(2019)によると、イギリスでは里親の委託期間の中の家族委託ワーク（里親委託・養子縁組をもっぱら担当するソーシャルワーカー）の役割の一つとして、里親家庭の全構成員に対するカウンセラーの役割があるとされ、里親認定の際に実子への面接は両親である里親希望者とは別室で必ず行われており、実子の家庭での様子の視察も合わせて行っている。

また、Ofsted (Office for Standards in Education)と呼ばれる教育・児童機関の基準を審査する機関があり、民間のフォスタリング機関（児童支援機関）もこの審査の対象となっている。この中で LA Fostering と言う機関に対しての報告で「里親に関するフォーラムや里親家庭が参加するグループ活動において、里親の実子（娘や息子）の相談に乗ることや情報を共有することを推奨すること」が述べられている（山本　2019)。

代表的な里親家庭の研究機関である The Fostering Network や Coram BAAF が里親家庭の実子向けの冊子を作成している。

Coram BAAF の冊子は絵や色を使用しワークブックのような年少児にとっても分かりやすいような作りで、里親について、家族について、実子の気持ちを書き込めるようになっており、実子が話し合いなどをする際に参加できるように実子の親である両親への説明も書かれている。

The Fostering Network の冊子は 2 冊の実子に関する冊子を作成している。1 冊目は、実子についての研究などを踏まえ、実子の心境などを詳細に説明するものになっており、ソーシャルワーカーやフォスタリング機関(里親支援機関)との関わりにも触れているもの(The Fostering network　2008a）であり、2 冊目は、実子自身に里親家庭について絵を交えて分かりやすく書かれているもの（The Fostering Network　2008b）もある。さらに Stella と言う実子に向けた里親や委託児童に関する絵本も出版されている。委託児童がやってくる前から里親家庭での生活に慣れるまでの生活を描いた内容になっており、2013 年に行われた IFCO 大会においても紹介されている。さらに、The Fostering Network では毎年 10 月に Sons and Daughters Month と呼ばれる実子の里親養育における役割や貢献を祝うためのイベントを行っている。このイベントを通して実子の存在が里親養育において必要不可欠であることを広め、実子への理解を進めている。しかし、イギリスの支援は、民間で行っているため政策・時間・財政面の制限があり各支援者の考え方によって内容が変わってしまうという問題点があると指摘している（山本　2019)。

一方、オーストラリアでは、ビクトリア州でエビデンスベースの実子支援プログラム「I care 2」が開発されている。「I care 2」というプログラムは 4 つの冊子とその内容が入った CD-ROM で構成されており、Berry Street、Westcare、FCAV (Foster care association of Victoria)の 3 つの団体が助成金を受け共同で作成したものである。このプログラムでは、里

親認定や研修の際に実子を集め、グループで里親制度についての学習や家族の概念について、里親養育が実子に与える影響などを話し合う機会が設けられている。2 つの年齢のグループに分けられており、13 歳以上の実子は実子のグループ活動ができるような取り組みもなされている。効果としては、これまで見えてこなかった実子が抱える悩みや相談を受けるようになったという。しかし、実施機関によっては職員の実子支援への関心のなさが浮き彫りになってしまうことや、経費や人員を増やす余裕がなければ実子がプログラムに参加できない場合があるという問題点がある（山本　2019）。

他にも年に 1 回は必ず 6 歳から 16 歳の実子と面接するようにしている。委託児童とどのように 1 年付き合ってきたか、何か素行等で問題があるかなどを聞きとる。州全体で里親養育を支援する制度があるためフォスタリング機関が経済的な負担をし、里親家庭の実子も含め里親や里親の家族へ心理的なケアができるようになっている（山本　2019）。

西オーストラリア州にあるフォスタリング機関の Wanslea Family Services では、Edith Cowan 大学の研究チームとともに、実子への支援方法の冊子として Fostering Together : Resources to Support Sons and Daughters of Foster Cares（共に育つ：里親の実子支援の方法）を作成している。このプログラムは、年齢に応じた子供向けのカード付きの本（5～10 歳向け、11～14 歳向けの 2 冊）と里親の実子を支援するためのガイドブックで里親とサービス提供者のための小冊子と里親の実子の経験を収録した DVD など主に 3 つのプログラムから構成されている。前述したビクトリア州の「I care 2」と同様に子どもの年齢に合わせて里親制度の理解等を促進させる目的を持っている（山本　2019）。

このように、海外では各フォスタリング機関や里親関係の団体が活動し支援を行っている場合が多い。

第二節　日本における実子に対する支援について

旭ら(2018)によると、日本では、実子の支援の関心は少しずつ高まりつつも、実子の支援だけで語られることはほとんどないという。実子への関心が低く、実子が支援を受けるということへの理解が、里親、ファミリーホーム養育者、実子本人に広まっていない。実子の年齢が家庭によって様々であり、全国各地に点在していることから、実子同士が集まる機会を作り参加してもらうことが難しい。さらに、実子支援を行う支援者、実子が相談できる場所が非常に少なく、実子の支援の視点もまだ十分でないことから、実子支援に取り組む里親関係機関や直接実子支援を行う人材が少なく、活動を行っていく経済的な支援も十分ではないと指摘している。

日本において、実子のいる里親家庭の割合を調べた量的調査は非常に少なく、登録里親や委託児童の数のように、日本全国の実子の詳細な数の把握や年齢の把握は行われていない。また、実子についての質問項目があっても、日本ファミリーホーム協議会の全国調査以外は実子を定義したうえでの調査は行われていない（山本　2019）。この調査は有効回答率が 83.4%である。全国のファミリーホームに対して実子がファミリーホーム内で生活している

割合は 121 ホーム中 56 チーム・合計 90 名（平均年齢 20.4 歳）とし、90 名以外に養育者では 4 名（5.6%）、補助者では 48 名（18.5%）が実子であることが分かった（ファミリーホーム協議会　2012）。

里親への関心が高まってきた 2000 年以降に出版された里親関連の書籍には、実子への配慮が必要なことや委託児童との生活が開始された後に実子が不安定になることなどが述べられている（山本　2019）。これまで国内で発表された実子に関する論文は、自らの里親の実子としての経験を述べたものがほとんどである。

その中で、渡邊（2008）は自分自身の経験や他の実子の声から実子に代弁者がいないことや里親制度について実子にほとんど説明がないことなどの課題を述べている。また横堀（2012）は、実子は里親で他の子どものケアの優先をすることを理解し子どもならではの「適応」をしており、ロールモデルになることを求められる構造的負荷があるとしている。

実子が里親家庭に与える影響も大きい。里親家庭が不調となる原因として実子の存在が挙げられ（森　2001）、委託しやすい事例として「実子がいない」とされる一方で（櫻井 2000）、里親家庭の中で実子が養育者である里親を支えているとする研究もある（森本・野澤　2006、野澤　2010）。里親を対象とした調査において「里親たちは想像力や専門知識を総動員し、他の家族成員の力を借りて」里親養育を行っていると述べている（安藤　2010：57）。専門里親に関する研究においても、実子がいる里親の方が専門里親への関心が高いことが明らかになった（木村　2005）。この結果から、里親を始めた動機が里親に実子がいることで「子どもがほしい」ということではなく、社会福祉的な視点を持っていてさらに児童を育て初めていることがうかがえる（山本　2019）。

里親家庭には委託児童と実子の「不均衡な関係」（和泉　2006：101）や「利益の二重構造」（野澤　2010：11）があると言われ、被虐待児や障害児の委託の増加など課題がある養育が増加する中で、実子への支援の必要性がさまざまなところで提示されるようになってきている（全国里親等推進委員会　2013）。

日本では委託児童と実子のマッチングに関しても具体的に書かれているものは少ない。米沢は長年の養子縁組や里親養育のケースワークから「すでに実子や養子や里子がいる家庭の場合、その子どもたちよりも年少でいくつかの年の開きがあるほうが受け入れやすくて望ましい」（米沢　2003：27）としているが、それが一般的に行われているとは限らない。

児童相談所においての里親認定にする調査研究の中で、10 の地域のマニュアルなどを調査した結果、実子に関する質問項目や注意点を含んでいるマニュアルは数自治体しかないことが明らかになっている（林ら　2014）。

この調査によると、児童相談所が養育里親認定調査の項目として「家族の雰囲気」を挙げ、その中には「家庭内の人間関係」「実子や同居人の里親への理解度」「実子の成長状況」の項目がある。申請者の家族情報としては「希望者の実子・同居人の理解」を挙げているが、認定調査方法の内訳として、家族全員との面接をしている自治体と里父母のみの面接だけの自治体が混在しており、どういった面接をしているかなども明らかにされていない。これら

の調査からマニュアルのある都道府県や政令都市が少ない中でも実子に関する項目はさらに数が少ないことが理解できる。

河野（2015：87）は大分県の里親委託の事例の中で「里親家庭に実子がいる場合は、家族状況の把握、実子ケアの視点から状況に応じて実子面接も実施するとよい。」と述べている。里親及びファミリーホーム養育指針において実子への同意の必要性が述べられるが、実際の同意の取り方についての決まりがなく、調査する地域や人によって大きく異なることが課題として挙げられる。

実子に対する具体的な支援としては、ピア・サポート支援がある。実子のピア・サポート支援に向けてのアンケート調査を実施し、その中で日本において、実子はこれまでピア・サポートを受ける機会もほとんどなかったが、他の複数の実子が出会うことにより実子が持つ意識に変化をもたらすことを明らかにした（山本　2016）。

平成 28 年度の児相福祉法改正により「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」において、今後の社会的養育の在り方を示す「新しい社会的養育ビジョン」が取りまとめられ、愛着形成に最も重要な時期である 3 歳未満については概ね 5 年以内に、それ以外の就学前の子どもについては概ね 7 年以内に里親委託率 75%以上を実現、学童期以降は概ね 10 年以内を目途に里親委託率 50%以上を実現するということが示された。まさに今が日本における里親事業の重要な過度期であることが分かる。今後増加していく里親家庭、ファミリーホームにおいて実子支援は必要不可欠となるのだ。

以上見てきたように、日本国内の実子に対する支援例は少なく実子支援に関する研究も多くない。そこで私たちは、実際に実子支援を行っている団体を訪れ、実施支援の実情と課題を明らかにすることを目的にヒアリング調査を行った。

第二章　里親家庭実子支援を行う NPO へのヒアリング調査

第一節　調査目的と方法

先行研究では実子への支援は国内外ともに事例や前例が少なく、当事者の方からより具体的なお話を聞き、実子支援の現状や当事者の体験から実子支援の課題を探るために、ヒアリング調査を行った。

今回のヒアリング調査は、奈良県にある「NPO 法人　おかえり」の代表と職員の方にインタビューを行った。代表（姉）と職員（弟）の桝田ご姉弟は里親家庭の実子としての立場と里親家庭を支援する立場の両方を持っている。インタビューは新型コロナウイルスの影響により直接の訪問は難しいと判断し Zoom によるオンライン上での対面で行った。主な質問内容は、①実子支援について具体的にどのような活動を行っているのか②桝田さんご姉弟が里親家庭の実子として感じた事やエピソード③実子支援についてである。同意を得たうえでボイスレコーダーでも会話を録音させていただいた。論文に使用するにあたり、個人情報に配慮することを伝えた。

第二節　ヒアリング団体の概要

「NPO 法人　おかえり」は、里親家庭や児童養護施設等の社会的養護の下で暮らす子どもたちが、義務教育や高等学校を卒業して、里親家庭や児童養護施設を卒業して里親家庭や児童養護施設等を巣立つ際、行政の支援もなくなり様々な問題に直掩する若者を支援することを目的に 2015 年 5 月に設立された。

＜取り組み＞

・「ふるさと」プロジェクト！

「ふるさと」プロジェクト！は、社会的養護の下で暮らしている子どもたちと農業体験をしたり採れた野菜で料理をするなどし、交流を重ねながらつながりを作り社会的養護の下を巣立った後も自立をし安心して暮らせるように子どもたちの「ふるさと」（心の拠り所）をつくるプロジェクト。

・おかえりサロン

おかえりサロンは、里親家庭や児童養護施設で暮らす中高生や巣立った人が自由に話をして楽しく過ごしたり悩み事を相談して心をリフレッシュしたりできる場所。

・実子サロン

実子サロンは、月に 1 度里親家庭の実子が気軽に集まり、抱える悩みや戸惑いを相談できる場所。個別相談の他にもお菓子作りやものづくりができ、一緒に楽しみながら話ができる場となっている。

・life café

Life café は、里親家庭や児童養護施設等で暮らす子どもたちや巣立った人たち、施設職員や里親さん等が気軽に立ち寄れる場所。料理をつくったり、パソコンで仕事や住居を探したり、自立に向けての SST(ソーシャルスキルストレーニング)をしたりと、来た人が自由に過

ごせる空間になっている。

第三節　ヒアリング調査結果

①実子支援について、具体的にどのような活動を行っているのか

質問　実子支援をなぜ始めたのですか

答え　私自身が里親家庭の実子で 13 年くらい前から里子の子どもたちと暮らしてきました。今まで、短い期間の子も入れて 29 人の子どもたちと生活を共にしてきました。兄弟ごとの受け入れもありました。里親と里子には児童相談所の担当職員がいて、定期的にお話しする時間を持ってくださるのですが、私たち実子には担当がなく、ドラマとかでしか聞いたことがないような言葉を子どもたちから聞いたり、生活リズムが違う子どもたちが来ることでの戸惑いがあり、そのようなことを聴いてもらう場所や人がいないことに最初のうちは戸惑ったりしていました。一般生活の中で生きていても、親が里親をしている人は周りにはおらず共感できる人いませんでした。奈良県里親会のイベントに参加すると実子さんとの出会いはありましたが、年に何回かなので同じ境遇の人で同じような悩みや戸惑いを持つ人との出会いがなく、それを自分の中でもどう消化していいのか分からないというのがありました。そんな時に私たち実子にも何かしら支援があればいいのになと思いました。ドキッとするようなことを聞いたとしてもそれを自分なりにどう受け止めていいのか分からないというのもありました。もちろん、親や本人と話したりしますが自分としてどういう立場で、家の中でどういう立ち位置でいたらいいのかという迷いなどもあり、相談する場所があったらいいなと思い続けていました。周りの関係機関の方にも（実子支援を）やらないか働きかけていましたが、全然動きがなかったので、できるところからやってみようかということで始まりました。また里親の集まりが月 1 回開催されているのですが、そこで NPO 理事長ではなく里親家庭の実子としての意見が聞きたいとの声が多く、「実子が大きいから里子とうまくいくかもと思ったがそんなこともなかった」や「思春期になって難しくなってきた」と言う話を聞き、里親からのニーズや周りから実子を心配する声もありやろうと思いました。

質問　実子サロンの年齢はいくつくらい子どもですか

答え　今つながりのある子は中学生ですね。サロンに来ていませんが社会人ともつながっています。年齢は設定していません。

質問　実子サロンはどのような雰囲気ですか

答え　自身の相談に重きを置いているわけではありません。お菓子作りや物づくりをしつつ、仲を深めようとしています。自分からたくさん話すタイプではない子どももいるので、関係づくりから始めて、話せるところからという感じで相談してもらっていま

す。相談だけではなく、あそこに行ったら楽しいことがあるというように心地よい居場所であるよう心掛けています。例え親と来ても、実子と親で部屋を分けていて、里親は里親で別のスタッフが対応し、実子も別の部屋でお菓子作りなどをしています。

質問　実子同士の関係性を重視しているのか。養子や親を混ぜないのか。
答え　おかえりのそもそもは、養子支援です。他のイベントで誰でも来られるものを開催しています。実子サロンのように、実子同士で集まる場を大事にしています。

質問　実子サロンでの参加者の反応はどうでしたか
答え　アンケートや感想では「自分話していることを聞いてくれてよかった」「また来たい」など良好です。親からもメールで「喜んでいた」と書かれていました。

質問　児童相談所や子供支援センターとの連携はしていますか
答え　すべての里親家庭に支援を受けさせたいと考えていて、奈良県から委託事業をうけて支援をしているのですが、対象が中学生以上なので、中学生以上の住所はもらえますがそれ以下はもらえません。そのため、児童相談所や支援センターにお便りを渡してもらうようお願いしています。児童相談所も行く頻度が異なるため毎月きっちりと、どの里親家庭にも届いているかは難しいですが、認知度は少しずつ上がっています。今までなかった支援のため、まだ始まったばかりという感じです。長いスパンで支援をしなければ定着は難しいと考えています。一昨年の 11 月から始めて、児童相談所の方も必要性を感じてきてくれていると思います。里親さんからも連絡が来たり、近くに来たついでに事務所によってくださったりします。バイトや勉強が忙しくて来られなかったり、地理的に遠くて来られないという意見を聞き、こちらから行きますよとお声掛けはしたりするんですが、民間でやっているので、児童相談所の担当者が来ますとかだったら恐らくスムーズにいくところも、私たちの場合は「誰？」というところから始まるので実子にどのような影響を及ぼすか慎重になっている人もいると思います。

質問　広報活動で力を入れている点はありますか
答え　お知らせを毎月作っています。児童相談所に数十枚持って行って、里親家庭に訪問する際に一緒に持っていってほしいとお願いしています。10 年活動していて、信頼関係ができているので、新しいことをしても受け入れてくれます。活動を始めたときも里親家庭のところのお姉さんと言う認識はありましたが、何をするのだろうという反応ではありました。

質問　広報活動で力を入れている点はありますか

答え　お知らせを毎月作っています。児童相談所に数十枚持って行って、里親家庭に訪問する際に一緒に持っていってほしいとお願いしています。10 年活動していて、信頼関係ができているので、新しいことをしても受け入れてくれます。活動を始めたときも里親家庭のところのお姉さんと言う認識はありましたが、何をするのだろうという反応ではありました。

質問　実子からの相談は何が多いですか

答え　里子に対して肯定的になれない場合もあり、その方々からの相談もあります。今の段階ではそこまで重い相談を受けたことはなく、雑談のようなものが多いです。

質問　実子の悩みは親に伝えるのか。

答え　本人の悩みは本人のものなので、緊急性の高いものや気を付けるべきことがはっきりしている場合は実子の許可を得て親に伝えることもあります。今のところ深刻な悩みは受けていないので、その時その時で一緒に解決できるようにしたいです。

質問　今後はどのような活動をしていきたいですか

答え　里子と一緒に生活するようになって、自分たちも里子と同様な支援を受けられると思っていましたが、なかったことに驚いきました。そういう経験も踏まえて、居心地がよく何でも相談できるようなサロンを目指したいと思っています。1 年やってみて知ってもらわないと先には進めないと痛感しました。もっと支援機関や児童相談所の力を借りたいと積極的に言っていいと思いました。それぞれの立場から話を聞き、どのような活動が望ましいか、つながった実子さんの実際の会話の中でどういうものがあればもっと来やすいのか、時間帯や日程など、作り方から見直した方がいいかなと思っています。将来的には実子を全面的にだすのではなく、居心地の良い活動を目指したいです。元々団体の活動は里子や施設出身者の支援のため、実子支援が異物のように感じられるところもあるのですが、実子もいての家族なので、実子支援をすることで里親家庭もよりよくしたいと思っています。児童相談所も忙しいのは分かってはいますが、少し実子の話も気にかけてもらえるとありがたいと感じます。同じ立場の人の話を聞きたくなった時に私たちでよかったらという感じで、細く長く活動していけたらと思っています。

②桝田さんご姉弟が里親家庭の実子として感じた事やエピソード

質問　里親に里子が委託されるまでの流れについて教えてください

答え　ご家庭で事情があって、実の親御さんと生活するのが難しいと判断された子どもさんは、児童相談所の方が迎えに行って、児童相談所の中にある一時保護所に行きます。そこで大体 2 ヶ月くらいの間に、施設に行くか里親さんの所に行くか、それか家に帰

って在宅で児童相談所の方の支援を受けるかの、だいたい 3 パターンくらいを決定していきます。その間は一時保護所の職員さんに勉強を教えてもらったり遊んだりとか、ご飯食べて寝てっていう一般的な生活をして、ただ、一歩も外には出られない生活をし続けます。その間に、担当になった児童相談所の職員さんがこの子にとってはどこがいいのかをまず考えます。その時に、実の親御さんの虐待がすごく重くて裁判沙汰になっているような状態になっていたらそこにはいきませんが、一般的には実の親御さんに聞いて、本人さんの意向を聞いて決定していきます。そこに対して私たち里親家庭から何か猛プッシュをすることはないです。基本的には児童相談所がどこへ行くか目星を付けて、こんな子お願いできませんかとフワッとやってきて、話させてくださいっていうのがフワッと来るので。内容を聴かせてもらって、その子を受けるかどうか、私たちの意見ももちろんですけど、今いる子どもたちとの相性も年齢とか性別とかも踏まえたうえで、いいですよって言ったら、だいたいその子たちが見学に来ます。ここが君たちの住む家だぜっていうのが紹介されて、それでマッチングがうまくいけばＯＫなのですが、実親さんの親権が一番強いので、子どもさんが里親さんでいいって言っても、里親という言葉で取られちゃうって思っちゃう実親さんもいるそうで、里親は嫌です、施設がいいですっていう人も中にはいらっしゃるっていうのは聞いたことはあります。あとは、宗教上の問題で、里親さんの所が何らかの宗教法人をされていたということで、その父親さんところがまた違うところ（宗教法人）にっていうと嫌だなっていうのがあったり。いろんな状況はあるとは思うのですが、そんなんで児童相談所と里親さんと本人さんに聞いたうえで決めていきます。ちなみに、私たちが 13 年前に子どもらが児童相談所の職員さんと見学に来た際、両親を見て「ああ、いい人だな」って思ったそうなんですけど、私たちがちょうど仕事終わって帰ってきていて、その時チャラチャラ生きていたので、その姿を見たその子は「やばい、絶対いじめられる」って思って、だいぶドン引きしたらしくって。後日、児童相談所の方にちょっと怖がっているので面会来てくださいって言われて行きました。未だに「あの時、めっちゃ怖かったし！」って言っていますね。そんな中で私たちの希望というか、里親さんの中には登録をして、何年も何年もたっているのにやってこないっていう方もいらっしゃるんですよ。そんな時にまだですかとか受け入れ態勢整っているので、子どもさん紹介してもらえませんかっていうアクションをおこす人はいます。基本的にはいろんなことを決めるのは児童相談所の職員さんたちのはずだと思います。

質問　里子が委託される際に両親からはどのような説明がありましたか

答え　桝田さん（姉）：元々、里親の受け入れる前の里親を登録する時点で、「里親になりたい」と説明があったので、「里親になる、ならない」の所から一緒に考えていました。いろいろなことを考えてはいますが、（私と父は）「結局やってみなきゃ分からないか

らやってみるか！」という感じでした。でも、弟と母は、「いや、ちょっと待って、一生だよ？」と。傷ついている子もいたりするので、途中で「やっぱ、無理！」ってなったら、その子たちを余計に傷つけてしまうので、それはどうなのだろうと。だいぶ（家族間の話し合いが）平行線だったのですが、やっぱり最後は話し合って「やろうか」という方向になりました。こっちも「いつか来る」というのはずっと思っていて、実際受け入れたのは2年くらいたってからでした。(里子が)「来る！」ってなった時に、私は周りの友人にも言ったりしました。「妹ができるの！」って。私はもう成人していたので、(友人たちは)「どういうこと?! どういうこと?!」みたいになりましたね。友人たちもすごく手伝ってくれて、服を分けてくれたりとか、参考書とかをくれたりしました。私たち家族だけではなくて、みんなで巻き込んで、みんなで迎え入れるみたいな感じを作っていけたから、だいぶスムーズだった気がします。でも最初は物音が気になったり「見られているー！」ってなったり、ちょっと戸惑いました。でも比較的スムーズだったと思います。

質問　里子との年齢差はどれくらいでしたか

答え　桝田さん（姉）：最初の子は10歳。だから、本当にお姉ちゃんみたい。ふみ姉って呼ばれていました。もう髪の毛が「わあ！」って（いう状態に）なっていて、母が（美容院の）予約をして、家に来て、着替えも友だちがいろいろくれていたので、タンスを開けたらものすごく服が貯まっているみたいな状態で。来るまでの話し合いの中で、児童相談所から「お父さんとかお母さんの存在を伝えてほしい」、「家庭的な雰囲気を味合わせてあげてほしい」っていうのもあったので、家族で「お父さんってどんな？」とか、「お母さんってどんな？」っていうお父さん像とかをまず話し合って、「(座る時は）お父さんは上座だよね」とか「ちょっと一品増やしてみる？」とか、そういうことを色々考えたうえで受け入れたっていうのがありますね。

質問　里子とはどのように距離を縮めましたか

答え　桝田さん（姉）：基本的には変わりません。もちろん配慮はしますけど、(里子によっては) 聞いちゃいけない部分とかあると思うから。その子にとって不利益になるようなことは極力しないようにはしていましたけど、私たちにとっても家なので、頑張ったらしんどくなるし。今も子どもたちが家にいますが、「大人だってしんどい時がある！」とか、もっとお姉ちゃんの嫌なこととかあると思うけど、最近は13年経ってきて徐々に自分らしくいられるようになってきました。「もう！ふみ姉！」って言われながら「だってふみ姉もしんどいもん」って言っています。(自分を飾って）作るよりも家族としてありのままでいたほうが子どもたちにとっていいと思うし、きっと子どもたちも（気を遣われている、飾っている感を）感じやすいと思います。感じ方が結構繊細なので、(飾って）作るよりは一緒に楽しく過ごしていけるようにとい

うことに意識を向けたほうがいいかなって思っています。最初は本当に話し合いました。家族とも姉弟同士でも。姉弟でよく出かけています。私自身ドライブが好きなので連れまわして。色んな所に行って同じ時間を過ごして、良いことも悪いことも色々聞いて。でも、最初はまあ疲れました。「いいお姉ちゃん像を見せなきゃ」、「頼れる背中を見せなきゃ」と気負いが強すぎて。意外と巣立った後のほうが気楽です。それぞれの人生を生きていく中で、私たちと繋がりを持ってくれています。私はみんな（家族同然）一緒だと思っているのですが、子どもたちがそれを望んでいない場合もあるので、そこは無理強いせず。来たかったら来てくれてもいいし、私たちとずっと繋がっていてくれるのなら、私たちも受け入れます。（子どもたちが）出ていった後のほうが、色んなことをもっと気楽に話せるようになりました。

質問　一緒に暮らしてみて親子水入らずの時間は必要だと思いますか

答え　桝田さん（姉）：私は最初の頃、13 年前は子どもたちが寝静まってから母と二人で当時流行していた夜カフェによく行っていました。世間話をするけど結局子どもたちの話をしちゃいます。子どもたちのことがやっぱり大切なのだと感じました。そういう時間は本当にありがたかったです。

桝田さん（弟）：家族で出かけたりとかそういう時間があったので、全然気にならないです。

桝田さん（姉）：今も学校に行っている間とか「よし、ランチ行こう！」とかちょっとはしています。極端に分けるということはないけど、みんなで過ごす時間も大切だし子どもと過ごす時間も大事だし、臨機応変に対応しています。

質問　戸惑いや驚きを感じた際に誰に相談していましたか

答え　桝田さん（姉）：あまり第三者に言えません。日常会話としての家族の話はできるけど、「こういう生い立ちでね…」とかそういう話は軽はずみに言えません。やっぱり家族になってしまいます。それでも実子としてどういう捉え方したらいいのだろうとか分からなくなった時に、そういう聞いてくれる人がいてくれたらなと。衝撃にも守ってくれて安全な状態で聞いてくれて「それでいいよ」とか「それじゃダメだよ」とか、教えてもらえたらよかったなとは思います。私たちは、成人していたから、それがもっと本人たちと年齢が近かったら、そういう状態だったらやっぱり戸惑いはもうちょっとあっただろうなとも思うし、成人して私はそういう保育士とかやっていたのにも関わらず、やっぱり「お母さん取られた」みたいな気持ちもないわけではなかったので、「いいな～」とか、「あんた今までどんだけ（甘えてきたか）」とかあると思うのですが、やっぱりそういう気持ちが生まれるときも瞬間、瞬間であったので、年齢に沿った支援の仕方もこれからまとめられる所もあるだろうなとも思います。

質問　里子を迎え入れてよかったなと思ったこと、逆に大変だなと思ったことを教えてください

答え　桝田さん（姉）：その時々で、親が里親をやっていてよかったと思うことがあります。親が里親活動をしていなかったら、世の中分かっていなかったなと思うことがたくさんありました。当たり前が当たり前ではなかったりとか。里子が来て大切にしたことは四季折々の行事とか誕生日とかだったのですが、（桝田さん自身は）誕生日とかは当たり前だったのですが、そういうの（誕生日など）が極端に言うと初めてだったりとか、プレゼントをもらって号泣していたり、そういう姿を見ていると当たり前じゃないと実感した瞬間でした。里子の子から「ふみ姉、こうやってみんなであったかいごはん食べられるのは幸せやねんで」と夕食のときに言われて「そうか、そうやな」とい言いながら…、こういうつぶやきもありましたね。「家族みんなが自分のために集まってくれて、お母さんが自分の好きな料理を作ってくれて、ケーキとプレゼント用意してくれて、お祝いしてくれるのが、今まで生きてきた中で一番うれしかった。」と言ってもらったこともありました。あと、風邪ひいたときの看病してもらった時とか、私は当たり前すぎたけど、してもらって本当に泣いていました。そういう一つ一つのギャップですよね、自分が生きてきた当たり前と、全然違う当たり前を持っている子どもたちとの生活なので、そこでのうわぁってなる感情の波とかが、どう落とし込んだらいいか、どこに落としたらいいか。親が（里親を）していなかったら知らないことが多かったです。見えなかった世界っていうのがすごくいっぱいあったなって思います。

桝田さん（弟）：家族もより話し合いとかをするようになったりとか、誕生日だったり四季の行事を一緒にするようになって、より仲良くなったりとかそういうことはありました。

桝田さん（姉）もうみんな大人だったので、生活スタイルがばらばらだったから。親がやってもらったことしかできないという考えを持っているので、なるべくいろんなことを体験させてあげなければいけないと思っています。誕生日とかいろんなことをやっていて、二回味わっている感じです。

桝田さん（弟）：大きくなってから誕生日の歌とかなかなか歌わないと思うので、ケーキ買うくらいだと思うのですが、毎回歌って、写真撮っていう…。

桝田さん（姉）：日常は豊かになったかなとは思います。自分たちが力不足で受け止めてあげられないっていうのも今までで 29 人の中ではあったこともあるし、中には極端な例ですけど、傷つけようとする子もいなかったわけではありません。けど、その時に、私は里親やファミリーホームが増えていったらいいと思っているんですけど、その子が寂しいと思う瞬間、例えば夜であったり、それをずっと付き合えるかっていうと、なかなか難しい。次の日も日常はあるっていう中で、基本的な安心安全は確保するっていうのが無理だなって思った瞬間もあって…そう考えた時に施設だっ

たら交代での勤務があって、そういう中だったらもっとフォローできることもあるだろうなと思うし、子どもにとってもそっちの生活の方が合う子も、もちろんいるので、一概にどうっていうものではないなって思います。

質問　ご両親が里親を続けられなくなった時、引き継ぐことも考えていますか

答え　そういうことも考えて、里親からファミリーホームの方に変えたっていうのもあります。ずっと継続的にできるように。里親でももちろんできることはいっぱいあると思うのですが、養育者も迎えてより手厚い状態で子どもたちと生きていくっていうのを考えた時に、うちの家としてはファミリーホームに変えた方がいいのではないかと感じました。もともとは里親でずっとやっていたのですが、3 年前くらいにファミリーホームに変えまして、法人の中での一事業としてやっています。実際、親は 13 年前からすると年齢を重ねていますし、いつまでもっていうのは難しいけど、今いる子どもたちとか、できません、終わりっていうのはやっぱりしんどいなって思うので、そこらへんは考えているつもりです。

質問　公的機関やご両親にこうしてほしかった、気づいてほしかったことはありますか

答え　話聞いてくれれば良いなとは思います。両親はなんかあったら話してますし。その子のことについても一緒にみんなで、元の家族だけの家族会議とかもしていました。「どうする」とか「今ちょっと調子悪いよね」とか。やっぱりそれぞれ人間だし、思春期とかでそれまでとキャラが変わってくるとか。ちょっとしたことでイライラしているなとか、そういう変化が時々としてやってくるけど、そういう変化の中で、その子たちも気持ちよく生きてほしいし、私たちも私たちでほっとしたいから、解決方法はいつも探していました。家族としてそんな不満はありません。友人たちが面白がって絡んでくれるので、「あの子もうそんなになったん」とか「おおきなってんな」とか、いっしょに成長を見てくれていたりするのは心強いです。私たちがモヤっとしたときに話を聴いてくれる人がいたらより良かったなっていうことぐらいですかね。

質問　日常生活の場面で何か困難を感じた場面はありますか

答え　冠婚葬祭の時がちょっと大変かな。喜ぶことだったら全然良いのですが、例えば法事とか、その子たちを知らない私たちのおじいちゃんとかだったら、出づらかったりします。そこには、普段見ない親戚の人も集まってきたりします。「その子誰？」ってなると。それでいろいろ話し合ったりはしました。「私たちのやっていることは、結局家族ごっこでしかないのかな」とか、そんなことを言いながらいろんなことを話し合うのですがたどり着くのが、「私たちが良かったらいいんじゃないか」に落ち着くんです。日本はまだまだ血縁であったり、血っていうところを重んじたりするところが強いと思うのですが、そこはちょっと海外とはまた違うのかなって思います。そう

いうところの難しさ、同じ家族として生きていくにあたっても、そういうちょっとした時に違和感があります。どうしようかな、私たちは家族と思っていても周りはそうとは思ってない場合もあるし、これだけ一緒の家族として生きていて、私たちじゃどうにもならない時とか、私たちが引いたわけじゃないのに線とか壁とかが見えてしまうときがあって、しんどいなと思う時はあります。

③実子支援について

質問　日本で実子支援の活動が少ないのはなぜだと思いますか

答え　気づいていないからだと思います。障害児を持つきょうだいと同じで、里子と里親までは支援の焦点が当たっていますが実子までは気づいていないのではないかと思います。全国でスピーチをしたときに、いろいろな話をしましたが一番反響があったのが実子支援についてでした。これからやります程度の話であったのに、目からうろこだったとの声が多数ありました。何年もやっている方々もいるのに、抜けているのだと確信しました。

質問　実子支援の課題を教えてください

答え　まずは知ってもらうことです。今まで好意的な声ばかりだったので実子支援への理解はあると思います。児童相談所との繋がりを持っていますが、里親は個々なので自分たちの存在を知らない人もいます。活動から知ってもらいたいです。里子への支援も里親から団体への問い合わせがあったり、学校へ紹介してもらうのも最近になって起こるようになりました。実子はもう一歩だと思っています。

質問　今後どのように実子支援が広まったらよいと思いますか

答え　桝田さん（姉）：別にそこにこだわらないでも生きていける人もいると思うんですよね。そもそも、里親家庭で生きていくってなっても、私らの家族みたいにファミリーってなって「一緒に生きていこうぜ！」みたいなノリの人もいれば、割り切って生きていくこともできると思うんですよね。割り切ってしまったらこういう支援は必要ないと思うんですけど、何かしらのしんどさとか、一緒に住むなかでの大変さはあると思うんですけど、求めてなかったら別に、なくてもいいかなって思います。ただ、求めた時になかったらしんどいよねってところでの活動なので、これをすごく大きい活動の規模になっていきたいっていうのは特にはないです。「今、奈良県の中で聞いてみたらいるらしい、じゃあ、やるか」ぐらいのノリでやってはいます。全国でもいろんなところで里親さんがいらっしゃるので、その所々で必要に応じて。

桝田さん（弟）：逆に実子がしなくてもね、子ども家庭相談センター（奈良）とかね。

桝田さん（姉）：私は里親支援機関に猛プッシュしていたのですけど、できるところが里親さんのフォローの中で実子さんのフォローをしてもらって。だけどやっぱり、

どこにも言えず親にも言えず、言っていいのかなっていうのも迷っているとか、もやもやしている人はすごくしんどいと思うから。もっと発信とかしていけたらと思うのですが、世の中いろんな人がいるので、できたらだれも傷つかない言葉で発信はしていった方がいいと思いますけど、なかなか難しいです。言ったら響くんですよ、いろんな方は「いるな」とか「ほんまや」とか、だから、やる人が燃えてくれたらどこでも良いと思います。一番可能性があるのが里親支援機関とか里親の専門相談員さんとか、児童相談所の方とか、その方たちが里親さんのフォローの一貫として気にかけていただいて、そこからだったらできそうな気がします。大きく打ち出さなくても、日々の業務の中でプラスアルファとして考えていただけるのであれば。ただちょっと話を聞いてくれたら楽になったりする。結構最初の方は、児童相談所の人が来てくださって、里親と里子の部屋別にして、それぞれ聴いてくれて、横の部屋から「ふみ姉がこんなことで怒っていた」とか聴こえて、「ちょっと待て、言い訳させろー！このやろー！」っていうこととかもあったりしました。そういう時、私も言えるところあったらいいなっていうのはありました。

桝田さん（弟）：姉弟同士で言えたから、良かったけど、一人っ子とかきょうだいがそんなにしゃべらないとか、そういう場合は特に。

桝田さん（姉）：実子それぞれの解決の方法は、選択肢として増えていけばなって思います。こういう集まりがあるのだったら、集まりに来たらいいし、専門職の方が話聞いてくれたりするのが増えたら良いと感じますね。

第三章　考察

ヒアリング調査ではNPO法人おかえりも本来の活動は養子支援であるため、実子支援の活動はまだ始めたばかりであることが分かった。しかし、桝田さんご姉弟へのインタビューにあったように、里親の会等ではNPO法人おかえりの代表というよりも里親家庭の実子としての話を聞きたいという参加者も多く、「実子が大きいから里子とうまくいくかもしれないと思ったがそんなこともなかった」や「思春期になって難しくなってきた」という声をよく聞くことから、里子と実子の関係性や里親家庭で育つ実子への配慮が必要だと感じている里親は多いと考えられる。桝田さんご姉弟の場合は、里子が委託されるときにはすでに成人していたことやご両親が養育里親をやるかどうかという段階で家族と話し合い、家族全員が納得したうえで始めたこともあり、迎える準備が整えられたため里子の受け入れは比較的スムーズであった。しかし桝田さんご姉弟は年齢も離れていて、何か悩むことがあればその都度家族会議も開くなど両親や里子との関係性が良好であったにもかかわらず、親をとられたという気持ちや、良いきょうだい像を見せなければならないなどの精神的な負担を感じる場面も多かったという。また桝田さん（姉）の場合は、里親委託を始めた頃は保育士をしていたということもあり、自宅に帰っても仕事の感覚があったと話していた。これらのことから、実子は年齢に関係なく悩みや葛藤を抱えていると述べられる。

先行研究でもあったように、私たちはすでに養子や実子や里子がいる場合、その子どもたちよりも年少でいくつかの歳の開きがあったほうが受け入れやすく望ましいと考えていた。しかし、年齢差が大きい場合であっても葛藤や混乱があることを理解した。一概に実子との年齢差が小さいほうが負担は大きく、年齢差が大きいほうが負担は小さいと述べることはできなく、また逆も然りである。

さらに実子自身が「支援を受ける立場」にいるという認識が低く、わだかまりを持ったまま大人になることも多い。これらは実子が里親・ファミリーホームにおける養育者の実子になるという理解を十分にできないまま、実子としての役割を任される現状があるからだと言える。桝田さんご姉弟が【里子と一緒に生活するようになって、自分たちも里子と同じように、児童養護施設の職員さんが訪問した際に話を聞いてくれるかと思ったら無くて驚きました。】と戸惑ったように、支援が必要であると感じた実子が助けを求める先が無く、心にそのまま蓄積し続ける。養育者と実子の両方が「実子も支援を受ける立場」であるという家庭内の認識が必要不可欠だ。前述したようなイギリスやオーストラリアの冊子と似たようなものを取り入れると、実子として生きることが想像し易くなるだろう。

現在の研究で注目されているのは、里親家庭の実子として家庭内における役割や状況の変化、里子との関係性といった、家庭での人間関係の中で生じる葛藤や混乱である。しかし、【冠婚葬祭の時がちょっと大変かな。喜ぶことだったら良いのですが、例えば法事とか、その子たちを知らない私たちのおじいちゃんとかだったら、出づらかったりします。そこには、普段見ない親戚の人も集まってきたりします。「その子誰？」ってなったときに家族でいろいろ話し合ったりしました。】と桝田さんが話していたように、学校や親戚等の社会との関

係性にもニーズがあると考えられる。日本において里親委託や養子に関しては世間に十分に広まっているとは言えないため、実子は社会が受け入れていないことへプレッシャーを感じ、世間から見た里親家庭の関係性や里親家庭というものへの捉え方に直面した時にやるせなさや難しさを抱える。「里親養育への認識の低さ」だけでなく過度の「里親制度への称賛」は、社会における里親養育の役割とそれに伴う実子の家庭内の役割に大きく影響している（山本　2019）。親戚や学校等の社会との関係性は、話し合えば解決する問題ではなく、社会が里親家庭について認知する必要がある。すぐに成果が見込めることではないため、NPO 法人おかえりの桝田さんがお話されていたように長期にわたって支援を行い、里親家庭についてや里子・里親だけではなく、実子への支援も必要であることを知ってもらうことが重要であるだろう。

今後、里親家庭・ファミリーホームは増加する。今まさに潜在化していた問題が顕在化していく日本である。日本の里親制度の中で実子は支援や研修などの対象から外されている。里親家庭は支援の対象であるが、里親の実子への支援はないという、この曖昧な存在や境界線は実子のアイデンティティを形成するうえで非常に困難であると言える（山本　2019）。何十年か後の当たり前を作っていくことの第一歩として、NPO 法人おかえりのような気楽に対話できる居場所としての支援の輪が広まることが重要である。その上で実子同士が集まりピア・サポートを受ける機会をつくると同時に、日本の実子支援プログラムを作成し人材を育成させるのが今後の課題だろう。

文献

旭比侶子、山本真知子、元藤透（2018）「実子のケア～参加者の語り合いを通して考える（第12回ファミリーホーム全国研究会 in OSAKA：DREAMS COME TRUE：みんなで描こう未来予想図）--（分科会）」『社会的養護とファミリーホーム』8、80-86

安藤藍（2010）「里親経験の意味づけ―子どもの問題行動・子育ての悩みへの対処を通じて」『家族研究年報』35、43-60

和泉広恵（2006）「里親とは何か―家族する時代の社会学」勁草書房

河野洋子（2015）「事例から学ぶ里親養育のケースマネジメント」『里親と子ども』10、84-86

木村容子（2005）「被虐待児の養育を担う専門里親の潜在的ニーズ―里親のニーズに関するアンケート調査から―」『関西学院大学社会学部紀要』98、93-105

厚生労働省（2017）「里親制度について」（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/syakaiteki_yougo/02.html）（最終閲覧日　8月12日）

厚生労働省・新たな社会的養育の在り方に関する検討会（2017）「新しい社会的養育ビジョン」（https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000173865.pdf）（最終閲覧日　2020年8月12日）

櫻井奈津子（2000）「里親養育への支援のあり方に関する研究―里親制度の活性化を求めて」『和泉短期大学「研究紀要」』21，11-21

The Fostering Network(2008a)「Fostering Families : Supporting Sons and Daughters of Foster Cares」（https://www.fosteringresources.co.uk）（最終閲覧日　2020年9月9日）

The Fostering Network(2008b)「My Family Fosters : A Handbook for Sons and Daughters of Foster Cares」(https://www.fosteringresources.co.uk)(最終閲覧日　2020年9月9日)

全国里親等推進委員会（2013）「里親およびファミリーホーム養育指針ハンドブック」

全国児童相談所長会（2011）「児童相談所における里親委託及び遺棄児童に関する調査」（https://www.zenjiso.org）（最終閲覧日　2020年8月12日）

日本ファミリーホーム協議会（2012）「ファミリーホーム実態調査報告書」

野澤正子（2010）「里子の成長過程分析と社会的支援の必要性」『新しい家族』53、2-13

林浩康・山本恒雄・大久保牧子・他（2014）「家庭養護を強力に推進するための制度および支援のあり方に関する研究：児童相談所における里親認定に関する調査研究」『日本子ども総合研究所紀要』50

森和子（2001）「養子縁組・里子の親子関係形成への援助に関する事例研究―児童相談所の里親委託における援助システムの構築に向けて」『生活社会科学研究』8，57-71

森本美絵・野澤正子（2006）「里子Aの成長過程分析と社会的支援の必要性」『社会福祉学』

47（1)、37-45
山本真知子（2013)「里親家庭における里親の実子の意識」『社会福祉学』(4）69-81、
山本真知子（2016)「里親・ファミリーホームの養育者の実子への支援：ピア・サポートに支援に向けて」『大妻女子大学人間関係学部紀要』(18)、27-37
山本真知子（2019)「里親家庭における実子への支援の現状と課題」『社会福祉研究』(135）15-23
山本真知子（2019)『里親家庭の実子を生きる―獲得と喪失の意識変容プロセス―』岩崎学術出版社
横堀昌子（2012)「家族とは、家庭とは：里親家庭の実子として暮らした日々を通して」『家族研究年報』37，39-56
米沢普子（2003)「里親を求めて―『愛の手運動』の 40 年の実蹟から」『世界の児童と母性』54，26-29
渡邊守（2008)「里親家庭での暮らし―里親の実子としての立場から」『新しい家族』51，113-131